随筆

経営の散歩道

川中経営所長　川中清司

▼天安門の空はどこまでも青く、まさに北京秋天。

はるか上空をゆうゆうと連凧が泳ぎ、かつての流血の大惨事がここで起きたとは想像もできない。

黄色のるり瓦、紅がら色の壁、さん然と輝く国章と毛沢東の肖像。天安門は門ではなく堂々たる城廓であり中国のシンボルだ。

一九四九年、毛沢東はこの楼上から広場を埋めつくした人民大衆に、声高らかに中華人民共和国の建国を宣言した。

▼—秦—漢—三国—晋—隋—唐—宋—元—明—清—。

中学生の頃に学んだ東洋史でまる暗記した中国の年代が、不思議に浮かんでくる。

北京の北西八十キロ、八達嶺の万里の長城をみる。秦の始皇帝は、なんと紀元前二〇〇年にこの巨大な石るいを築いたのか。

日本が耶馬台国として「魏志倭人伝」に登場するのは、ずっとあとの三国時代で三世紀の頃になる。

長い中国の歴史を目の当たりにして少年のように胸がおどる。

▼面積は日本の二十六倍、人口は十二億とも十三億ともいわれる。ひとりっ子政策が進められ、既婚者にはピルが無料で配られている。次の子が生まれると一緒に届出するのか年齢の違う双子も少なくないという。

あり余る労働力、未開発の広大な土地、ぼう大な資源の中国はいま、開放経済政策の波にのって外国企業の進出が相つぎ、都市部では女性勤労者の割合が三六%と過熱傾向にある。

▼中国の給料は日本の約一〇分の一とみてよい。だが外国の進出企業の製品コストが大幅に安くなるかというとそうではない。

品質管理の制度に慣れず不良品が多い。監督者を駐在させれば費用がかさむ。政府や要人との交渉にコネと金と時間をくう。モノの移動にも手数料がいる。

「条件をクリアーしてコストダウンするには、五百人以上の企業規模でないとむずかしい」と、田中武・北京田中眼鏡董事長はいう。

働く人の意識の違いも大きな壁になっている。

▼午後四時四十五分。もう退勤時間なのか道には洪水のように自転車が流れる。信号機はあっても赤信号を無視して横断する者が多い。自転車もつっこんでいく。

「中国の運転士さんは勇気があるんです」とガイドは笑う。

夜でも自転車のランプはつけない。ヘッドライトも余程暗くならないと灯さない。

「中国では交通信号を守らなくても罪にならないのか」と警察らしい人に聞いてみたが、「没有関係私人（メイヨークワンシンシーレン）」と返事がかえってきた。「わしゃ知らん」ということか。

▼ホテルの両替は一万円で五百二十四元の兌換券をくれた。一元が十九円のレートだ。

兌換券は外国人が使う金で中国銀行の名が入っている。これは屋台の店などでは使えない。外国人は乗物の料金まで二割ほど高くつく。

国民が使う人民元は中国人民銀行が発行する。使い古した紙幣を手にすると中国人の生活の匂いがしみこんでいる。

こうした二重通貨制度が外国人の目には異常に映り、中国経済の遅れを感じさせる。

▼迸行眼鏡店に入ってみる。広さ三十坪ぐらい。客は二人だけで若い男が鏡をみながら黒いセル枠のめがねをかけて、品さだめをしている。

ケースの中をのぞいてみる。日本製は見当たらない。ゴールデンクラウン（香港製）が五十八元（一、一六〇円）、西ドイツ製が百十元（二、二〇〇円）で、日本の一〇分の一程度の値ごろ。

店員に「チタンのめがねはないか」と聞いてみるが分からない。

▼甘家口通りの夕方五時。人と自転車の渦で身うごきもできないほど、市民の買物客で混雑している。

道路の両側にずらりと屋台が並び、魚や肉の切り売り、野菜やみかん、木の実、ブラウス、パンツなど日常品がそろう。ヌードのカレンダーも売っている。

甘栗を焼くいい匂いに人がたかっている。親指半分ぐらいの大きな粒ぞろいを、五元で両手のひらに山盛りいっぱいくれた。

紙袋を抱えると、じわりと温もりが伝わってきた。

第六十七回　北京の街角　その2